

民生病院常任委員会審査概要報告書

委員長 林 貴文

- I 開催年月日 令和 4 年 7 月 14 日（木）
II 会議時間 午前 10 時 00 分～午前 10 時 25 分
III 出席委員等〔出席委員〕◎林 貴文 ○横田 誠二 新開 広恵
熊木 義城 埜田 悦子 筏井 哲治
本田 利麻 福井 直樹 水口 清志
（◎…委員長 ○…副委員長）
〔議長〕坂林 永喜
〔副議長〕※本田 利麻副議長は委員として出席
〔説明員〕別紙名簿のとおり
〔委員外議員〕田中 勝文
〔事務局職員〕西本 幸夫 高嶋 史恵 吉本 昌史
〔傍聴者〕なし

IV 審査の概要

- 1 福祉保健部長より、公費負担医療対象者の高額介護サービス費の過少支給に関する陳謝があった。また、対象者へは早急に案内した上で追加支給を行うことや、再発防止に努める旨の説明があった。

2 報告事項について

〈 当局から報告はなかった。 〉

3 その他

。行政視察について

新型コロナウイルスの感染状況を踏まえながら検討することが報告された。

〈 委員から次の質疑等があった。 〉

（ 以下、質疑・質問内容は ○ 、答弁内容は △ で表示 ）

【がん患者補正具購入費用助成について】

- がん治療の副作用で髪が抜けた患者のための医療用ウィッグや、乳がんで胸を切除した患者のための補正具について、黒部市や小矢部市では購入費用の助成に取り組んでいる。本市でも補正具の購入助成事業について導入を検討しては。
- △ 医療技術の進歩によって、がん治療を受けながら社会生活を送る患者が増えている。がん治療においては、抗がん剤や放射線による脱毛や、手術による患部の切除等により、容姿外見の変化が生じる場合がある。このような変化によって精神的な苦痛を感じておられる方々をサポートし、その苦痛を軽減することは、そういった方々の社会参加を促し、生活の質を向上させていく上で意義がある。医療用ウィッグや乳房補正具の購入費用に対する助成については、県内各市や全国での導入事例を踏まえ、調査研究していきたいと考えている。
- 意義のある事業だと感じるため、ぜひ調査や検討を進めてほしい。(要望)

【万葉歌碑魅力発信プロジェクトについて】

- 令和4年7月15日に、万葉歴史館において、歌碑サイン設置お披露目会が開催されるが、翻訳コンテンツを作成されたピーター・マクミラン氏について、活動実績と、コンテンツ作成を依頼した経緯は。
- △ ピーター・マクミラン氏は、翻訳家や詩人として、日本の文化や文学を世界につなぐ架け橋となる活動をしておられ、これまでに百人一首や伊勢物語を英訳し、日米の数々の翻訳賞を受賞されている。また、相模女子大学の客員教授や、東京大学の非常勤講師、国文学研究資料館の招聘翻訳家でもある。令和2年度から3年度にかけては文化庁の多言語解説整備事業に従事されており、今回のプロジェクトにあたっては、日本観光振興協会から適任者として推薦、紹介をいただいた。お披露目会当日には、ピーター・マクミラン氏による講演が予定されている。
- プロジェクトを今後の万葉のふるさとづくりに活かしていくべきと考えるが、見解は。
- △ 今回のプロジェクトは、本市の万葉のふるさとづくりの取り組みが評価され、日本観光振興協会から、万葉集の観光活用の可能性が認められモデル地域として選定されたものである。プロジェクトの内容は、万葉歌碑の解説や、英訳や現代語訳をまとめたコンテンツの作成、万葉歌碑巡りに関するウェブサイトの作成、QRコード付きのサインの設置、リーフレットの作成である。これらは万葉集を地域の観光資源として、インバウンドも視野にその魅力を発信しようとするものであり、万葉歌碑を通じて万葉集への興味や関心が高まることはもとより、歌碑を巡ることによる周遊や周辺の観光にも繋がるよう、プロジェクトの成果を積極的に活用したいと考えている。プロジェクトに協力したいという声もいただいております、地域の方々の力添えを受けながら、万葉集に詠まれたふるさとへの愛着や誇りが高まるように取り組んでいきたい。
- インバウンドに力を入れていく中で、万葉集は観光素材としても大きな可能性を持っていると考えている。プロジェクトを一過性のものとせず、今後の万葉のまちづくりに活かしていただきたい。(要望)

【消防通信について】

- 今般の au の通信障害による影響は。
- △ 通信障害が発生した令和 4 年 7 月 2 日からの 4 日間では、高岡市と氷見市から受け付けた 119 番通報のうち au からの着信は 20 件あり、そのうち 13 件については救急車が出動した。令和 4 年 1 月から 6 月までの au からの 119 番通報の件数は 1 日平均 5 件であったことから、通信障害の発生期間における au からの 119 番通報は、平均的な件数であったと認識している。通信障害によって 119 番通報に影響があったという市民からの問い合わせ等はなかった。
- 見えてきた課題と対策は。
- △ 消防本部では、通信障害発生の情報を受けた令和 4 年 7 月 2 日の朝以降、市民向け災害案内メールで、au 等からの 119 番通報が繋がりにくくなっている旨を配信するとともに、この配信が自動的に転送される高岡ケーブルテレビでも、字幕表示による案内を実施した。また、高岡市と氷見市それぞれのホームページにも掲載をして案内をした。さらに、消防職団員宛に、通信障害が発生している旨を出動指令メールで伝達するとともに、分団長以上の団員に災害指令メールが届かない可能性があることを連絡した。今回の通信障害が原因となるトラブルについて問い合わせ等はなかったが、今後、同様の通信障害が発生した際に、その発生をすぐに把握できない場合もあると考えられる。消防のみならず、警察、海上保安庁も含めた国全体の課題であることから、国や通信事業者における対策検討の動きを注視したい。今後、同様の通信障害が発生した場合には、今回実施したように、ケーブルテレビやホームページ等のツールを活用し、高岡市や氷見市の方々に対する情報発信に努めるとともに、より大きな影響が考えられる場合には、消防職団員を招集して広報や出動体制を強化することで対応していきたい。
- 大きな影響がなかったようで安堵した。引き続き、市民の安全安心に繋がる活動をお願いしたい。(要望)

〈 当局から、次の報告・説明があった。 〉

〔生活環境文化部〕

- 。第 29 回高岡市廃棄物減量等推進審議会について

〈 委員から次の質疑等があった。 〉

【プラスチックごみの回収について】

- 現在のピンク色のごみ袋は、20 年間使用されており市民に定着しているが、回収方法を変更する理由は。
- △ 本市では、ピンク色のごみ袋でのラベルやキャップ等の回収に加え、高分子ごみとしてボトルやおもちゃ等を回収しているところである。一方で、国では、ごみを捨てる際の利便性への配慮やプラスチックごみの完全回収のため、プラスチックごみを一つの袋で一括回収しようという動きがある。一括回収の開始までには猶予期

間があり、本市としては令和6年度以降に実施することを考えているが、ピンク色のごみ袋では強度等の課題があり、新たな袋を考えて作り直す必要がある。ピンク色のごみ袋はまだまだ在庫があるため、この猶予期間に使い切るように取り組むが、配布は令和4年12月で終了とさせていただきたい。猶予期間の途中でピンク色のごみ袋がなくなった場合には、任意の透明な袋にごみを入れていただくようお願いしたい。審議会では任意の袋の基準等を示すべきとの意見をいただいたため、今後さらに検討を進めた上で、しっかり周知したいと考えている。新しい袋については有料化等も含めて今後検討するが、ごみの処理費用や物価の推移を見ながら、あるいは市民の意見を伺いながら、どのような回収方法がより効率的で利便性が高いのかを考えていきたい。

- 市民の負担が増えないように工夫してほしい。また、プラスチックごみが適正に処理され循環するような対応をお願いしたい。(要望)
- 本市は、ごみの分別については先進地の一つであると思っている。今後、ごみの回収方法の変更について連合自治会に説明されるようだが、もし希望があれば単位自治会にも説明会の場を設けていただきたい。2050年までにゼロカーボンをとという流れの中、一定程度の負担が必要となることは避けて通れないと考えているが、市民に混乱が生じないよう取り組むべきでは。
- △ このたびのプラスチック資源循環法の制定は、プラスチックの完全資源化を目指したものだとは認識しているが、本市では、これまでもごみの分別にしっかり取り組んでおり、プラスチックの資源化を進めてきた。これまでの20年間で、ピンク色のごみ袋を配布する際に自治会に負担がかかる等の課題があったため、このような課題の解消やごみ袋の入手のしやすさ等も踏まえながら考えなければならない。また、現在、不燃物は2週間に1回、あらゆる品目を一堂に集めて回収している状況であるが、回収の際にも課題があると伺っている。事業者や市民の意見をしっかりと伺い、どのような形での回収が望まれるのか、より効率的で確実なのか、見直しを進めたいと考えている。

〈 以上で委員会を閉じた。 〉

民生病院常任委員会 当局説明員（12名）

生活環境文化部長	二 塚 英 克	消防長	浦 島 章 浩
生活環境文化部次長	須 田 稔 彦	消防本部次長	山 口 喜 代 治
環境政策課長	室 谷 智	消防本部次長 総務課長	有 澤 智 文
文化振興課長	寺 井 知 恵	通信指令課長	礪 波 鉄 夫
福祉保健部長	戸 田 龍 太 郎		
福祉保健部次長	山 本 真 弘		
高齢介護課長	関 原 総 臣		
健康増進課長	赤 阪 典 子		